

この広報が届けられる十社は千二百年も以前に二住りしませんが、神社のお祭に特定の人達が組を作って奉仕する宮座と講ができました。明治以降をします。翌三十日の神

この神々は、土地の守護神と

降は段々減ってきていますが、お供に神宮講の人達が神輿を守護するのです。十月三日の後宴で飾りつけをとりお祭りの奉仕が終ります。あとは名前だけに止めますが、栗櫃座というのがあり

奈良時代に地方の様子を記

録して朝廷に提出させた事

がありました。これを風土

記と言いますが、山城の国

は残っていないので当時の

様子を知る事ができません。

ところが鎌倉時代の末に書

かれた積日本紀という本の

中に「久世郡の水度神社の

祭神は、地の神である天照

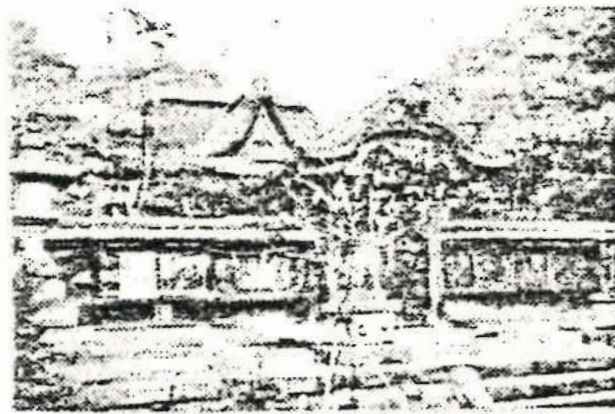
高弥牟須比命と和多都弥豊

玉比売命である」という山

城の国風土記の文章が偶然

残っていますので、水度神

市史の窓 No.2 2



水度神社とそれを祭る人々

水度神社にはまたいくつか残っています。その一つに神宮講があります。江戸時代に十二軒であったのが現在では六軒になっています。この講は本家の長男しか入れませんし自分勝手

にやめたり入ったりも出来ませぬ。毎年九月二十八日になると当番にあたっている家(当番)に集り注連を作ります。二十九

日は神社に集まって新しい注連を張り、神殿神輿の掃除をします。翌三十日の神幸祭と十月二日の還幸祭のお供に神宮講の人達が神輿を守護するのです。十月三日の後宴で飾りつけをとりお祭りの奉仕が終ります。あとは名前だけに止めますが、栗櫃座というのがあり

市史の窓 No.2 2